

## 1 歴史を単純に理解しようとする人びと

世の中、思いどおりに行かないことだらけ。

なんとか都合よく説明したい。いや、納得したい。

うまくいかないことはすべて他者のせいにする。

複雑な人間世界を複雑なままで向き合えない。ある意味での現実逃避。

## 2 陰謀史観、単純歴史観あれこれ

(1) 盧溝橋事件と日中戦争の勃発。事件は中国共産党の仕業？

●出来事の概要：1937年7月、北京郊外の盧溝橋というところで、たまたま駐屯していた日本軍と中国国民党軍のあいだで発砲事件が発生。どちらが先に手を出したかでもめ、紛争は拡大。ついに日中全面戦争へ。

●陰謀史観：中国共産党のスパイがわざと日本軍に発砲し、日本を中国との戦争の泥沼に誘い込み、共産党が敵対する国民党も日本も疲れ果ててしまった中で、共産党が中国を支配下に治めようとした。

●真相：今に至るも不明の点多い。中国軍の中の一兵士が上官の命令に反して、誤った銃を数発撃ってしまった、というのが現時点では真相に近い。しかも、衝突が起こってしばらくすると、日中両軍の間で話し合いがもたれ、紛争処理の合意にほぼ達していた。それを破って戦局を拡大したのは日本の軍部。

(2) ルーズベルトは真珠湾攻撃をあらかじめ知っていた？

●出来事の概要：1941年12月8日（ハワイ時間7日）、日本海軍航空隊はハワイの真珠湾に滞泊中のアメリカ太平洋艦隊と基地の航空部隊を奇襲攻撃、太平洋戦争の幕が切って落とされた。しかし日本側は宣戦布告が遅れ、攻撃が先になってしまったため、国際法違反、だまし討ちと怒ったアメリカは戦争に踏み切った。宣戦布告が遅れたのは、在アメリカの日本大使がアメリカ政府に宣戦布告状を渡すのが遅れたため、とされる。

●陰謀史観：じつはルーズベルト大統領と側近は、日本がハワイに近づいていることも知っていたし、宣戦布告状も受け取っていたが、わざとその事実を隠し、国民に日本がだまし討ちという卑怯なことをしたと思込ませた。つまり、これを機に日本をひどい目に遭わそうと思っていたルーズベルト一味は、日本を悪役に仕立てようと陰謀を働いた。

●真相：すでにルーズベルトらが知っていた事を証明する決定的証拠はいまだ出てこない。真相を知っていると証言した人びとの証言も信頼できない。それどころか、彼らにはじめて接した人以外、誰も同じ話が聞けていない。証拠の文書も誰も見ていない（「これはあなたにだけ見せよう」「あなたにだけ話そう」のたぐい）

### (3) 第一次世界大戦でドイツは陰謀で負けた？

●出来事の概要：1918年11月、すでに4年以上の戦争で事実上ほとんど戦争遂行力を失っていたドイツ国内で、些細な事件がきっかけで兵士が各地で反乱を起こし、收拾がつかなくなる。皇帝は亡命し、後に残された政府がやむを得ず休戦協定を結ぶ。その後、ドイツは戦争の責任を課題に負われ、1919年のヴェルサイユ講和会議では、支払えないほどの巨額の賠償金、海外のすべての領土とヨーロッパ内の一部領土の放棄、軍備の制限など、報復としか思えないようなひどい講和条件を飲まされる。

●陰謀史観：国内反乱は国際共産主義と結びついた秘密組織が兵士たちをけしかけて、政権打倒のために仕組んだもの。じつはドイツ軍はまだまだ戦えた。前線で戦っている兵士を背後（国内）から共産主義者が襲ってだまし討ちにしたようなもの（「七首伝説」と言われる）。ドイツは共産主義者とユダヤ人の陰謀で崩壊した（ヒトラーが繰り返し主張したのもこれ）。

●真相：ドイツ軍にもう戦う力は残されていなかった。それを知った最高統帥部は無責任にも文民政府に後処理を丸投げして逃亡。兵士・労働者の反乱は、我慢の限界に達した彼らが自発的に起こしたもの。やらせはほとんどなかった。講和条約の条件が過酷だったのは確かだが、1920年代中葉からドイツも仲間に入れてヨーロッパは平和共存の道を探ろうとの動きが本格化。賠償金についても何度か話し合いがもたれ、総額の引き下げ、支払いやすい仕組みの模索など、最初の過酷さは確実に変化していった。こうしたその後の動きは、例えばヒトラーの主張では完全に無視されている。しかし、1929年に突如起こった大恐慌で不安のどん底にたたき落とされたドイツ人は、使い古された主張を繰り返すだけのヒトラーに耳を傾けるように。

(4) 2.26 事件で天皇の偉大さがわかった？

●出来事の概要：東京には珍しい大雪の 1936 年 2 月 26 日、今の腐敗した政府に見切りをつけ天皇親政の新秩序を樹立しようとした青年将校を中心とする一派が、クーデターを決行。決起部隊は皇居を占領するのに成功し、天皇を孤立させていかに自分たちが愛国の情熱からこのような行為に出たことを訴え、ともに行動するよう説得。しかし、天皇は決起軍に何の好意も示さず、むしろ自分の信頼する大臣や側近を殺害した彼らに怒りを露わにし、結局反乱軍は行き場を失いクーデターは失敗した。

●トンデモ史観：政府関係者、側近、軍首脳が反乱軍を前に右往左往していたのに対し、天皇は反乱軍を前にしても毅然とした態度を貫いて彼らの野望を打ち砕いた。どれほど天皇がご立派だったか。

●真相：反乱軍が皇居を占領する直前、天皇に最も近い側近や大臣たちは幸いにも皇居に入ることができ、政府も軍首脳も断固たる態度でクーデター鎮圧の態勢にあることを天皇に伝えた。それを聞いて天皇は自分が孤立していないことを知り、反乱軍の説得に応じない態度を貫けた。

### 3 陰謀史観、トンデモ史観に共通するいくつかの特徴

都合よく世の中を動かす黒幕がいる。しかし、それを証明することはできない。

いくら事実を示して反証しても（歴史学では「実証する」と言います）、陰謀史観は何度でも登場する。しかも、新しい証拠もなくそのままのかたちで。

新証拠を発見したとか、新しい証言が得られたとかいっても、それを誰も再検証することができない。

丁寧な説明や都合の悪い証拠探しを屁理屈として拒否する。

### 4 そこで今日の問い

今日の話を踏まえて、歴史学を学ぶのにどのような意味があるのか、あなたなりの考えを自由に書いてください。